‘紅まどんな’で問題となる病害虫（コウモリガ）

コウモリガ幼虫は、‘紅まどんな’の枝に食入し、内部を加害する。一見するとゴマダラカミキリの被害にも似ているので、ここでは、それらを含めた被害の特徴と防除のポイントを紹介する。

被害の特徴

写真1　コウモリガ幼虫による‘紅まどんな’枝被害（6月中旬撮影）

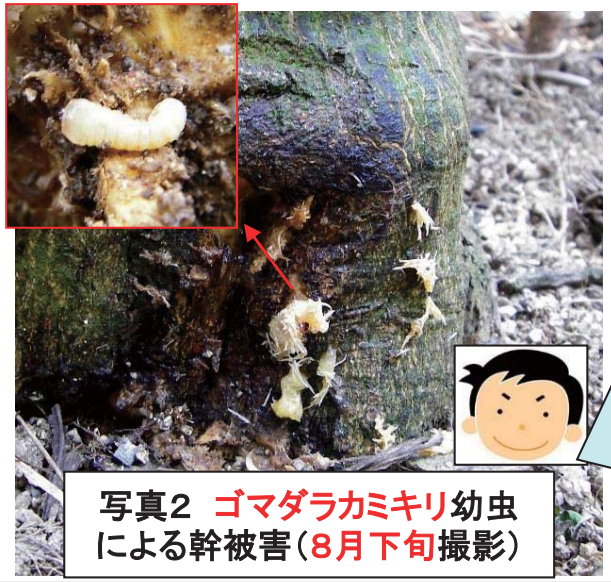

写真2　ゴマダラカミキリ幼虫による幹被害（8月下旬撮影）

・コウモリガは、前年の秋、地表面に産卵、し、卵で越冬、翌年春にふ化、雑草を食べて大きくなり、やがて‘紅まどんな’の枝に食い入る。写真1の左側のように食入孔を、虫糞や木屑でまんじゅう型に覆う特徴がある。

・ゴマダラカミキリは、7月頃から、主に樹幹地際部に卵を産み込むため、似た被害が見え始めるのは8月以降であり、虫糞や木屑も食入孔付近にまき散らすため、前者と区別できる。

防除のポイント

1．主な幼虫発生時期：4～8月

2．耕種的防除等

・春期にふ化した幼虫は、雑草（ワラビ、ヨモギ、イタドリ）を食べて大きくなるので、被害が多い場合は、可能な限り園内外の除草を徹底する。

・この虫に登録のある薬剤がないため、写真1にあるような虫糞被害を確認したら、ただちに、内部の幼虫を針金等で突き殺し、被害の拡大を防ぐ。

・庭木のアジサイ等が近隣にあると、それが発生源となる事例も見られたので注意する。

・ゴマダラカミキリに登録のある園芸用キンチョールEの噴射で被害が抑制された事例もある。